



慶應義塾大学ビジネス・スクール

ケース・メソッドによる学習の心構え

ケース・メソッドとは

皆様は、アメリカ映画で、「裁判もの」、「法廷もの」を御覧になったことはありますか。訴訟事件に関する膨大な資料のファイル（これを、ケースと言う）が、検事側と弁護側における法廷闘争の基礎資料になります。映画によっては、時として、ケース資料を駆使してなされる、法廷を模擬した仮想上の論争シーンが繰り広げられることもあります。このような、ケース教材を基礎資料として練り上げられた論陣が、主張の相対峙するグループ（時には個人）間で張られ、そこで両者間の論争が、より妥当と考えられる結論に向けて、更に、磨きをかけしていく過程が、ドラマティックに展開されます。私は、そのようなシーンで描かれるような討論のプロセスそのものが、ケースによる学びの理想に近い一つの型ではないかと思います。10
15

ケース・メソッドという教育方法が経営学の分野で初めて採用されたのは、ハーヴード・ビジネス・スクールであることは、有名です。経営を職業とするプロフェッショナルを養成するとき、如何なる教育方法が有効かを熟慮した当時の教授陣が到達した結論は、それまでのロー・スクール（法学大学院）、メディカル・スクール（医学大学院）などで実践されていた教育方法の採用でした。それらの既存の大学院では、学問のベースとなる情報がケースという形で、あるいは、カルテや標本という形で実際に存在した事例として利用することができました。それらの過去における具体的な事例の分析の積み重ねから学ぶことこそが、経営を専門職とする人々にとって実践的に有効な方法なのだと確信にもとづいて、次々と、経営の分野における過去の事例が教材化されていったのです。20
25

このような過去の事例を教材として、学んで行くという方法（いわゆるケース・メソッド）と、一般に講義方式（レクチャー・メソッド）と呼ばれている学習方法とでは、どのような点に、如何なる違いが認められるのでしょうか。比較論の中で、よく言われることは、従来の講義方式では、学び手の目的は、一般的な知識・知見の取得であるのに対して、ケース・メソッドでは、様々な情報の交換、加工、解釈を基にした経営全般に関わ30

本ノートは、ケース・メソッドによる一連の学習の開始時に、受講される皆様向けに書かれた解説である。ケース・メソッドについて、その由来、学びの要件、予習・復習の方法等について記した。企業研修のオリエンテーション用としても使用することができる。作成者は慶應義塾大学大学院経営管理研究科および慶應義塾大学ビジネス・スクール教授太田康信である。[2000年12月]